

代美術に本格的に取り組む公立美術館として建築家（故）黒川紀章氏の設計で1989年5月3日の開設である。図1に示すように美術館は公園の北部地区にあり、その北側には全国的にも珍しい漫画専門の図書館である「まんが図書館」もある。

図1は美術館のウェブサイト <https://www.hiroshima-moca.jp/moca/about> の”地図データ ©2026 Google”をスクリーンショットで関連部分のみ切り取って掲載させていただいた。

時間通りに参加者が美術館の円形エントランス（写真1）に集合した。写真2は入り口付近での記念撮影である（終了時に撮影）。予定では各自の自由行動ということであったが、全員で美術館内の作品を鑑賞することとなった。65歳以上は半額料金という特典を利用して、開催中の「コレクション展



写真1：円形のエントランス



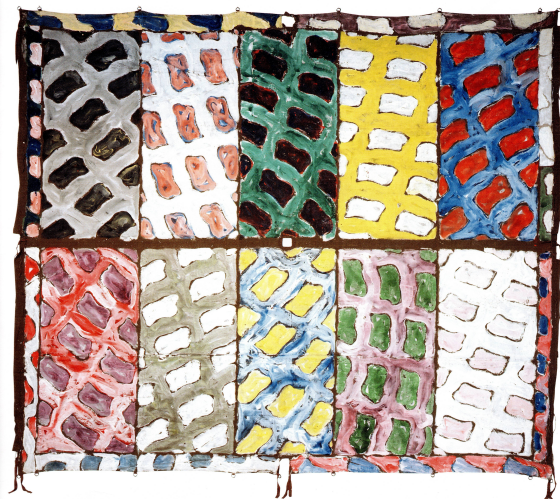
写真2：記念撮影（左から、寺本，於保，中田，植村，椿，鈴木，渡邊の各会員）

2025-III」（一階展示室A1～4），「フィンランド スピリット サウナ」（地階展示室B-2）なる二つの展示を鑑賞した。

写真3はコレクション展で配布されたパンフレットの表紙である。スキャナーで電子データとして取り込み掲載させていただいた。コレクション展はハイライトとリレーションズという二つのテーマで構成されていた。前者はA1~A3の各室毎に決めたキーワードに沿って美術館収蔵作品を展示していた。後者は、A4を使ってゲストアーティストに迎えた平野薫さんの作品展示であった。展示室A1のキーワード「解体力」は、既存の価値観や表現形式を問い直すことを意味し、芸術における根源的な衝動であって想像の出発点とのものである。展示室A2のキーワード「変容する力」は「解体」の先にある変容のプロセスであり、展示室A3のキーワード「存在と記憶」は人間の存在や死、記憶といった根源的な問題に向き合うことを象徴するということであった。A4で作品展示をしている平野薫さんは、古着の衣服などの糸を一本一本使って再構成することで物に宿る気配などを表現されてきた作家ということであった。

各展示室の展示作品を一つずつ紹介しておく。A1の展示作品を写真4に、A2の展示作品を写真5に、A3の展示作品を写真6に掲載する。写真7はA4の展示作品で天井から床に届くような大きさで実に繊細な作りの作品であった。これらはいずれも美術館で配布されたパンフレットに掲載の写真をスキャナーで取り込んで転載させていただいた。いずれの展示室でも作品の写真撮影は原則禁止されており、具体的な姿・形が紹介できるのは唯一パンフレット掲載の写真である。

芸術作品の鑑賞において「共感する」とは、作者の作品に込めた心に触れることができたと感じることであろう。これまで風景、人、物などをそのままあるいは若干のデフォルメ程度のいわば具象度の高い作品に慣れ親



広島市現代美術館

コレクション展 2025-III

Hiroshima City Museum of Contemporary Art Collection Exhibition 2025-III

ハイライト + リレーションズ [ゲストアーティスト: 平野 薫]



HIGHLIGHTS

+

Relations

Guest Artist
HIRANO Kaoru

2026 2.14 SAT - 6.7 SUN

© 2025 MOCA. All Rights Reserved.

写真3：配布されたパンフレット



マルセル・デュシャン《フレッシュ・ウィドウ》1920(1964再制作)
Marcel DUCHAMP, Fresh Widow, 1920/1964

写真4：展示室A1での一つの作品

しんできた者としての率直な感想は、今回の作品は抽象度が高く感じられて共感するところまで到達できなかった，ということになる。

一方，美術館の地階では「フィンランド スピリット サウナ」と題して，フィンランドにおけるサウナについて，歴史と文化的背景を説明するパネルが壁面を飾り，サウナの実物模型とともにポイントとなる蒸気発生器具をはじめ温度計，帽子などの関連するグッズが平面的に展示されていた。壁面の説明を読みながら展示物を見たり触ったりする，という楽しい時間を過ごした。

サウナの起源は不詳であるが，蒸し風呂での発汗浴は紀元前時代より世界各地で見られ，フィンランドでは斜面に掘った横穴を使用していた。木造の小屋の中で火を焚く，という現代のサウナに近いスタイルは西暦600～900年頃に北欧地域，バルト諸国，ロシアなどの寒冷地で成立した。特に，それが生活の一部として深く根付いたのがフィンランドである。

フィンランド人とサウナとの付き合いは，言ってみれば「揺り籠から墓場まで」である。農村部では1940年代までは「出産の場」として使用されていた。加えて「吊いの場」として死者を湯で洗って納棺する場でもあった。また，民間療法で病を治癒する場とし



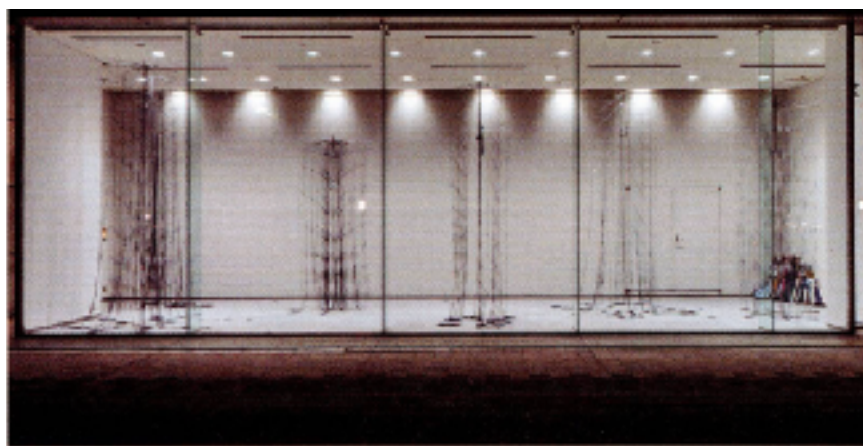
森村孝良《階段を降りる天使》1991
MORIMURA Yasumasa, Angels Descending a Staircase, 1991

写真5：展示室A2での一つの作品



クリスチャン・ボルタンスキー《死んだ174人のスイス人たち》1990
Christian BOLTANSKI 174 Dead Swiss, 1990

写真6：展示室A3での一つの作品



「中野誠「中」」絹や反復
Installation view of Keouu Hirano "Umbrella"

写真7：展示室A4での一つの作品



写真8：サウナの実物模型



図9：ロウリュを行う器具の模型

て、あるいは燻製など食品加工の場として使われ、さらにクリスマスや収穫祭などの年中行事でも使われてきた。厳しい自然環境の中でフィンランド人の暮らしを千年以上も支えてきたサウナは、心と体を癒すのに欠かせない「よりどころ」となっている。

フィンランドのほぼ全ての家庭にサウナが備わっており、国民の60%近くが週に1回以上はサウナに入る、という統計もある。サウナはもはや単なる習慣ではなく、人々の暮らしと切り離せない「文化」というべきもので、2020年にユネスコ無形文化財に指定されている。

熱した石（サウナストーン）に水をかけて水蒸気を発生させることを「ロウリュ」と呼ぶ。サウナの入浴法で体感温度を上げて発汗作用を促進する効果がある。ロウリュの音、立ち昇る蒸気、木の香りなどが至福の時間を与える、というのがサウナの



写真10：様々な温度計

の魅力であろう。写真8にサウナの実物模型を、また写真9にロウリュを行うための器具の模型をそれぞれ示す。会場では、これらの石を熱して水をかけ、立ち昇る蒸気が小屋の中に充満してくる状況で木製の長椅子に触っている自分を思い描き、どのような感覚だろうか、フィンランド人と同じように至福の時間を感じるだろうか、などと想像しながら展示を見ていた。温度計、湿度計、食器類、サウナ帽子、杓子、桶などのサウナで使うさまざまな道具類にもフィンランド人の思い入れが見える。写真10に壁に展示されていた様々な温度計を示す。

予定より早くすべての展示を見ることができたので、集合して玄関で記念撮影をした（写真2）。そこで例会終了とし、近くの発着場から15：32発の広島駅行きバスで帰宅するグループと残って他の施設を見学するグループに分かれて解散した。